

Title	羽田さんと「民族文化論」の思い出に
Sub Title	Reminiscences of professor Hada and the lectures of "Ethnical representation"
Author	工藤, 多香子(Kudo, Takako)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.58 (2019. ) ,p.223- 229
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	羽田功教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Isao Hada 退職記念に寄せて = Zu Ehren Prof. Isao Hada
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20190331-0223">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20190331-0223</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 羽田さんと「民族文化論」の思い出に

工 藤 多香子

この日吉紀要『ドイツ語学・文学』第58号は羽田功さんの退職記念号だ。そこに今、私は餞のことばを書こうとしている。着任以来ずっとお世話になってきたので、ぜひ書かせて欲しいと思った原稿だ。それにもかかわらず退職記念号にふさわしいことばが見つからず、とまどっている。羽田さんの退職をまだどこか事実として受け止められないのだ。羽田さんのいない日吉キャンパスが想像できないし、実感もわからない。来年度を思い描こうとしても具体像が浮かばず、不安で思考が停止してしまう。そして、耐えられずにパソコンの前から逃げ出す。ここ数日、それを繰り返している。羽田さんがこの大学にいることを自分がどんなに当たり前のこととして受け止めていたか、今さらながら気づかされた。

羽田さんとの初めての出会いはよく覚えている。私は2000年に経済学部で最初のスペイン語教員として着任した。それまでドイツ語・フランス語・中国語の3語種だった第二外国語にスペイン語が加わることになったのだ。その採用面接の日のこと。今は独立館となっているかつての研究室棟の会議室には、経済学部の第二外国語教員がほぼ全員集まっていた。もちろんスペイン語教員は誰もおらず、知った顔はひとつもなかった。そこで私は自分の研究を発表しなければならなかった。初めての場所で、知らない人たちを前に話すことにひどく緊張していた。何よりも「キューバ

国民文化における「アフリカ性」という研究テーマを、主に文学や言語学の専門家にはたしてうまく伝えられるかが不安だった。案の定、「スペイン語を教えるというのにフェリペ2世もスペイン帝国もでてこない研究をしているのはいかがなものか」と意見される方もいた。最初のスペイン語教員となる人は、「辺境」キューバの研究者などではなくスペイン語学やスペイン文学・歴史の専門家であって欲しいと願ってのことだろう。もっともだと思う。多勢に無勢。私は歓迎されていないのだと半ばあきらめかけていた。そんなとき、私の研究に少なからぬ興味をもって好意的な（と私は勝手に解釈したのだが）発言をしてくれる方がいた。それが羽田さんだった。「私はユダヤ人の研究をしているのですが」と前置きされたうえで、「アフリカ系の人々の、国や地域を超えたネットワークに関心がある」ということをおっしゃられたように記憶している。よき理解者を得て、励まされた思いだった。このとき、羽田さんの顔と名前はしっかり頭に刻まれた。人の名前と顔を覚えるのが苦手な私には珍しいことだ。それほど私は羽田さんの発言に救われた思いだったのだ。

幸い私は羽田さんの同僚となり、その数年後、ある研究会に声をかけていただいた。学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」プロジェクトの一環としてスタートした、羽田さんが代表を務める研究会だった。その成果は『民族の表象——歴史・メディア・国家』という一冊の本にまとめられただけでなく、研究会メンバーが講師となるオムニバス形式の総合教育科目「民族文化論」を立ち上げて、学生に直接伝えることになった。2007年度から続いたこの講義も羽田さんの退職とともになくなってしまふ。例年100名を超える履修者がいた科目なので惜しいことだ。でも、羽田さんの強い問題意識と情熱から生まれたこの講義のコーディネーターは、他の人には務まらないだろう。

この科目で毎年私が講義するのはせいぜい2～3回だった。それでも、毎回学生から感想や意見を提出してもらうこの授業は、講義の意図をどこ

まで伝えられているかをうかがい知ることができ、私にとってはチャレンジな経験だった。学生の質問や意見はできるかぎり次の授業でとりあげて回答した。こうした学生との「対話」を10年以上続けていくうちに、私の考え方も最初のころとはかなり変わってきたように思う。その意味で私はこの講義で教員として育てられた。この大切な経験を忘れないために、講義を通して何を考えてきたかを、「民族文化論」の思い出として少しだけここに書き留めておきたい。

講義ではキューバの「人種」をめぐる問題を取り上げた。キューバにはかつての宗主国スペインから来た人やアフリカから連れてこられた奴隷の子孫など、複数の「人種」が共存している。しかし、1902年に独立して以降、キューバ人とは「人種」が融合した混血の民族からなり、したがって人種差別を克服した国民であると想像されてきた。その傾向はキューバ革命後さらに強まった。混血で均質な国民イメージとは裏腹に、独立後も実質的にはホテルや娯楽施設で人種分離制度が続いていたが、フィデル・カストロはそれを革命直後に撤廃し、人種間格差を是正する政策を導入した。そして1962年には、人種差別は消滅したと宣言する。さらに、反体制勢力から革命を防衛する必要から、国民の一体化が優先的な政治課題となると、「人種」は国民を分断しかねない危険な考えとさえみなされるようになった。こうして、公共の場で「人種」が言及されることはほとんどなくなった。革命以前からすでに人種意識が希薄だったキューバ国民は、この事実をごく当たり前に受け止めてきたようだ。キューバ人にとって「人種」は意味がなく、したがって差別がないという見解は広く国民に浸透していた。ところが、旧ソ連・東欧社会主義圏が崩壊し経済支援が途絶えると、国内経済は混乱し、社会も不安定になった。そのとき、解決していたはずの人種差別が表面化し始めた。職務質問されるのは黒い肌の若者に多く、条件のいい観光業で働く人の多くは白い肌をしていた。1990年代後半になると若い世代を中心に人種差別に抗議する声があがり始めた。

それに後押しされるかたちで、政府も人種差別の存在を認め、解決の糸口を求めて検討委員会を設置したり、討論会を企画するようになる。しかし、一般市民の反応は冷ややかだ。「この国に人種差別はないのに何が不満なのかわからない」と言う人、「問題は経済格差。それを人種問題にすりかえている」と考える人が圧倒的に多い。そのため、人種差別の解決に向かう具体的方策はいまだ見つかっていない。人種概念は時代錯誤的で無意味と考える世論が、人種差別解決の障害となっている——掻い摘んでいえば、このような内容の講義だった。

キューバの独特な人種的狀況を知ってもらうことで、人種差別を解決したと自負する社会であっても「人種」に関する偏見が消えたわけではなく、状況次第では差別的行動となって表れること、また、人種差別がないと思っただ社会であればあるほど、人種差別を社会問題化するのが困難であることを学生には伝えたかった。そうすることで、自らの人種認識、さらには身近に潜む人種差別に思いを巡らせるきっかけになればと期待した。でも、学生のリアクションの多くは「複雑な人種問題のない日本に生まれてよかった」というものだった。今考えれば敗因は明らかだ。キューバという、イメージすらしにくい遠い地の事例を、学生の生活感覚に引き寄せて示すことが私にはできていなかったのだ。はてどうしたものか。毎年講義の時期を迎えるたびに頭をかかえた。

学生のレポートを読むかぎり、日本には他国のような人種問題が存在しないか、あったとしても自分には直接関わらない、一部の人々の問題と考える人が多いようだ。人種差別はどこか他人事なのだ。そして、その根拠とされるのは日本に住む人々の人種的・民族的均質性の高さだ。日本はアメリカやヨーロッパの国々ほどに、複数の人種・民族が混在する社会ではない。異なる人々を隣人にもつ経験がないのだから、日本に人種偏見・差別はありえない、というのだ。しかし、「人種」が異なる人々と共に暮らす経験が少ないがために、逆にステレオタイプや偏見が修正されないままに温存されているともいえるだろう。さらに「日本人はみんな同じ」とい

う思い込みによって、私たちはアイヌや在日外国人など人種的・民族的マイノリティーの存在を忘れがちだし、彼らの生きづらさに無関心になっている。彼らのリアルな経験に目を向けないために、偏見は修正されることなく野放しだ。そして、この気づかないままの偏見が、状況次第では差別的行為に容易に結びつく可能性を予見できなくなっている。これは、みんな同じ混血なのだから「人種」の問題はないと、偏見や差別に蓋をして見えなくしてしまったキューバの状況にどこか似ていないだろうか。

2017年の大晦日に放映されたバラエティ番組で、ある人気コメディアンが顔を黒く塗って登場した。エディ・マーフィーのモノマネだったらしい。これをめぐってネット上では人種差別だ、いやそうではない、と論争が起きていた。良い機会だと思って「民族文化論」を履修する学生にアンケートをしてみたところ、半数以上の学生が彼のやったことは人種差別には当たらないと答えた。さらにそのうちの多くが「これを人種差別だと指摘する方が逆に人種を意識しすぎていて、人種差別的だ」という意見だった。これはキューバで人種差別を問題化しようとする人が受ける批判とまるで同じだ。キューバと日本では、人種構成もその社会的・歴史的バックグラウンドもまるで異なっているが、自分たちには人種差別は無縁だと思うことで、逆に偏見や人種差別に対する批判力を失ってしまっている点で共通している。学生のコメントを読みながらそのようなことを考えさせられた。

自分に偏見があると認めるのはけっして快いものではないし、簡単でもない。差別的感情とは無縁でありたいと誰もが思っているはずだ。でも、どんな人であっても、歴史的に蓄積されたステレオタイプや偏見からそう簡単に逃られるものではない。私にも苦い経験がある。数年前にキューバの地方都市を訪問したときのことだ。以前泊まった、穏やかな白人男性が経営していた宿が使えなかったので別の宿を利用することになった。迎え入れてくれたのは大柄で豪快な黒人女性だった。彼女を見た瞬間、警戒心で私の身体が固まるのを感じた。部屋に案内されて一人になるとすぐに

ドアとすべての窓の戸締りを確認した。ひとまず安全とわかって安堵すると、今度は、自分のとった行動を振り返って啞然としてしまった。なぜ私はこんなに警戒したのだろうか。入口が暗く倉庫のようだったからだろうか、それとも不特定多数の人が出入りするプールが中庭にあったからだろうか。いや、彼女が「黒人」だったから身構えたのではないだろうか。前の「白人」の宿ではこんな警戒心をもっただろうか——。どう考えてみても、私が彼女の肌の色に反応した可能性を否定し去ることはできなかった。キューバで長く人種問題を調査し、差別される側の人々の気持ちもよく理解しているはずだった。それにもかかわらず、私にも黒い肌への偏見は染み付いている。それを思い知らされてショックだった。しばらくこの「事件」は私の頭から離れなかった。そしてこのときから、キューバの人種問題は単なる考察対象ではなく、自分自身の問題と深く結びついた問題となった。同時に、この私の偏見を見なかったことにしたまま講義してはいけないと自戒した。

このようにあれこれと思いめぐらしたことをすべて講義に反映できたかという点、必ずしも自信はない。なかなか思うように講義を組み立てられなかったり、時間内におさめきれなかったり、失敗ばかり繰り返していたように思う。さらに、私の講義内容が「民族文化論」の趣旨にふさわしかったのかも、少し心許ない。自分の課題に没頭しすぎて、講義全体への気配りが足りなかったのではないかと反省している。きっと羽田さんはあきれていたことだろう。それでも、勝手気ままに講義させてくださったのは本当にありがたかった。

羽田さんの退職記念号だというのに、ただ私的な雑感を書き連ねたまとまりのない文章になってしまった。こうして一緒に働いてきた日々を振り返ってみても、まだ私には実感がないのだが、羽田さんが退職される日はもうすぐそこだ。羽田さんに感謝すべきことをひとつひとつ数えあげればきりがないだろう。でも、最後にこれだけはどうしても伝えておきたい。

日吉キャンパスには自由でのびやかな独特の風土がある。この風土が築かれ、守られてきたのには、日吉主任や教養研究センター所長などを歴任された羽田さんの存在があつてのことだと私は確信している。羽田さんは、多様な教職員の声にじっくり耳を傾け、受けとめる包容力をもちながら、必要な場面では決断力を発揮する頼れるリーダーだった。羽田さんがいればきっと大丈夫と思わせる魅力があつた。でも、もう甘えることはできない。その責任の重さを考えると挫けそうになるが、この日吉の風土を次の世代へと引き継げるかは私たち次第だ。身を引き締めなければならない。羽田さん、長い間ほんとうにありがとうございました。